

を作ってくれた方、それぞれの役割に対して責任感をもって本人さんが実行して下さった事で、今年の本人委員会競技も大いに盛り上がったように思いました。



最後の記念撮影でも沢山の笑顔が溢れ、皆さんの晴れやかな表情とピースサインがとても印象的でした。

今回の運動会のスローガン「つながり」を心にとめ、育成会事業所協議会加盟事業所相互の更なる発展に努めたいと思います。

最後になりましたが、会場を提供していただいたアミティ舞洲の皆様、ご協力していただきありがとうございました。

そして、第17回事業所協議会舞洲運動会の開催に対しまして、過分なまでのご支援を頂きました株式会社ウインズ大阪様、特定非営利活動法人アダブテッドスポーツ・サポートセンター様、ありがとうございました。



### 第53回全国知的障害者福祉関係職員研修大会に参加しました

福島育成園 溝淵 健史

10月14日(水)から16日(金)にかけて高知県立県民文化ホールにて、日本知的障害者福祉協会主催の第53回全国知的障害者福祉関係職員研修大会

が開催されました。

今回、私は第5文科会の「老」に参加し、「幸せな老いを迎えるために」をテーマに講演、研究発表、シンポジウムが行われました。



講演では全国知的障害者施設家族会連合会 副理事長の南 守氏より、「看取る」ということを主題にお話しいただきました。

昭和半ばまでは家で生まれ家で死んでいくと言われており、地域でもお年寄りをよく見かけたようですが、現在は高齢化社会と言われている反面、病院や高齢者施設の充実もあり、地域でお年寄りを見かける機会も減り、地域との繋がりは薄れて来たようです。そんな中、誰にも看取られることなく、孤独な死を迎える「無縁死」される方が年間で3万2千人いるとの事です。その中で知的障がい者と言われる人が何人含まれているのでしょうか?という話から始まりました。

「看取り」とは死が差し迫り、本人の意識が薄れて来たときだけを指すものではなく、老化も含め、生命が徐々に下降線を辿り、生命が上昇に戻れない、死に向かう過程全体の事であり、家族の縁や人間的な縁が出来た時点から看取りが始まります。

入所施設の保護者へのアンケートにて「施設での看取りを希望するか?」の統計を取った所、施設での看取りを希望される保護者は63%近くだったというデータが提示されました。データの提示と共に「貴方の現在関わっている利用者の5年、10年後はどこで生活していると思いますか?」という問いかけがありました。明確に現在の施設で生活していると答えられる職員は少ないようでした。

知的障がい者の方を看取る主な場所として在宅、病院、施設がありますが、そのうち病院に関しては、看取る事を目的とした入院は認められないため、不幸にも治療中に逝く人のみ、付き添っている人に看取って貰えるとのことでした。

施設においては、「老いる」の支援は看取るという